# 小川三知作「宮越邸ステンドグラス」の制作背景とその後の展開について

篠﨑鈴（学習院大学）

小川三知（おがわさんち：1867-1928）は、日本の明治時代末から昭和時代初期にかけて活躍したステンドグラス作家である。東京美術学校（現・東京藝術大学美術学部）で日本画を学んだ後にアメリカへ留学、11 年余りの滞在でステンドグラス制作の技術を修得し、帰国後すぐに活動を始めている。

三知の主な活動期間は、日本におけるステンドグラスの最盛期とされる大正時代に重なり、慶應義塾図書館旧館や東京府美術館（現・東京都美術館）などの公共の建物、京都の柊家のような老舗旅館、さらに個人の邸宅として鳩山一郎邸（現・鳩山会館）や小笠原伯爵邸など様々な場所に設えられ、市井の人々にもその美しさが享受された。

三知のステンドグラスは、教会や洋館などの建築物に合う西洋的・幾何学的デザインの作品がある一方、日本的なテーマやモチーフを描写した作品や、障子の格子を応用した作品、そして背景に余白を十分にとった日本の絵画を連想させる作品など、欧米のステンドグラス作品には見られない、「日本風」を想起させる作品が多い。

このような作風が確立されるにあたっては、美術学校で学んだ日本画の素養があったことはこれまでにも指摘されているが、これに加えて筆者は青森県北津軽郡中泊町にある宮越邸・離れ「詩夢庵」に設えられた《四季花木障子》、《十三潟景観》、《水辺の風景》の三作品の制作が転換点となっていると考える。この宮越邸の作品は田辺千代氏によって発見されて注目を集め、三知の最高傑作と評価されている。

幸い昨年 10 月に宮越邸を実査することがかない、またあわせて注文主である宮越正治（みやこしまさはる：1885-1938）宛の三知直筆の書簡の解読を進めたことによって、作品制作の背景が明らかになってきた。三知の制作活動の中で、宮越邸の作品制作は、「純日本風」の邸宅に西洋由来のステンドグラスを嵌め込むという初めての試みであり、費用や時間を惜しむことなく注いで制作することができる機会でもあった。書簡には、木製の格子枠の応用や、ルイス・C・ティファニー（Louis Comfort Tiffany：1848-1933）が開発したグレージング技術の利用、作品の表側だけでなく裏側からの観賞も想定したデザインについてなど、ここで三知が企図していたことがつづられており、それらはその後に制作された作品の中にも反映されていることが確認できる。

そこで本発表では、彼の作家としての転換期をもたらした宮越邸の三作品の成立を論じるにあたり、三知本人が残した言葉や三知をとりまく人々の評価などを取り上げることにより、三知がどのような作品を制作しようとしていたのかを浮かび上がらせたい。これらを踏まえて、宮越邸において三知が成し遂げたことを明らかにすることにより、宮越邸三作品のステンドグラス史における位置づけを示すこととする。